鉄道網の整備（山陰本線の全通）

＊三村家文書3「萩線建設概要」
（工事中の惣郷橋梁）

＊三村家文書20「全通記念絵葉書」
（大津郡深川町発行）

解　説

明治・大正・昭和を通じ，地域振興のよりどころとして，人々は鉄道敷設を渇望していました。1933（昭和8）年2月，須佐・宇田郷間の開通により山陰本線が全通し，山口県の海岸部が鉄路でつながりました。全通を祝って各地で発行された絵はがきには，鉄道に寄せる沿線住民の期待がにじみでています（写真左下）。鉄道開通の日，萩市長は，その祝辞のなかで，大陸への航路整備を要望しています。人々の次なる熱い視線は，鉄路の先の朝鮮・満蒙にまで向けられることとなったのです。

海辺まで険しい山がせり出したこの区間には，山陰本線最長の大刈隧道（全長2215m）が建設されました。さらに，白須川河口には，沼地状の軟弱な地盤を克服し，日本海から吹き寄せる強烈な風波に耐えうる橋梁の建設が求められました。こうして設計されたのが惣郷橋梁です（写真左上）。

波打ち際の景勝地をゆるやかに大きくカーブする全長約190mのこの橋梁では，通過する車輌のレール音と大海原の波音がつむぎだす音風景を味わうことができます。

＊惣郷橋梁橋脚部（現状）。強度と耐久性を高めるために橋脚にはラーメン構造（鉄筋コンクリートの柱による格子状の構造）を採用しています。

山口県文書館所蔵アーカイブズガイド学校教育編
目次に戻る